



表紙写真: 北部水産グループに開設した魚病診断関連施設

## 目次

◎ 水産研究部長・北部水産グループ長あいさつ	2
◎ 各担当、チームのトピックス	
・水産試験研究機関が二拠点化へ！（企画指導担当）	3
・アオリイカの資源管理と増殖方法の検討（水産研究部 資源増殖チーム）	4
・かぼすブリ・かぼすヒラメに続く新ブランド！「かぼすヒラマサ」 （水産研究部 養殖環境チーム）	6
・マガキの地場採苗技術の現地活用に向けて （北部水産グループ 資源増殖チーム）	8
・北部水産グループに魚病棟が開設しました （北部水産グループ 養殖環境チーム）	9
◎ 浜からのたより	
・ヒジキ養殖で干潟を元気に！（北部振興局）	10
・佐賀関におけるカジメ養殖試験（中部振興局）	11
◎ 転入者紹介	12
◎ 令和元年度 水産研究部スタッフ及び担当業務	13
◎ 人権コーナー	14

## ごあいさつ



農林水産研究指導センター  
水産研究部長 古川 英一

知事選の関係で変則ではありますが4月26日付けで浅海・

内水面グループから水産研究部に着任しました。県に採用され最初の赴任地が水産試験場で今回が3回目となりますが、平成12年以来19年ぶりの勤務です。歴代の先輩方が築きあげてきた伝統の重さに負けないよう努めてまいりますので、皆様のご協力とご支援をお願いいたします。

さて、今年度は年号が「平成」から「令和」と変わった最初の年であり、水産研究体制も新たに水産研究部と北部水産グループとなり、担当地区を分け、海面並びに内水面の漁業と養殖業の振興・発展を図るための試験研究に取り組んでまいります。新体制となってスタッフ一同新たに「もうかる水産業」をめざしていきます。

水産研究部を含む農林水産研究指導センターの目指すべき姿として、「変化に対応し、挑戦と努力が報われる農林水産業を実現するための研究開発」を基本理念とし、「ニーズ」「スピード」「普及」を行動指針として、現場のニーズを常に把握しながら試験研究に取り組んでおりますので、皆様の忌憚のない意見や要望を水産研究部へ直接、又は普及指導員を介して頂ければ幸いです。頂いた意見や要望については、随時精査・計画立案し、再度皆様の意見を取り入れ、スピード感を持って試験研究に取り組んでまいります。また、その研究の成果は、普及指導員と連携し漁業現場に素早く普及させていきたいと考えています。

地域の水産業の振興を支え、もうかる漁業の実現のため漁業・養殖業者に必要とされる研究機関を目指し、職員一同、精一杯努力し新たな技術開発に努めてまいりますので、今後とも引き続きご支援、ご協力について重ねてお願いいたします。



農林水産研究指導センター  
水産研究部 北部水産グループ長  
伊藤 龍星

4月26日付で南部振興局から着任しました。2年ぶりの勤務になりますが、よろしくお願いいたします。

早速ですが、この度の組織改編についてお話しします。施設の老朽化と時代のニーズに迅速に対応するため、今年3月末、安心院の「内水面チーム」は県北豊後高田市の「浅海・内水面グループ」へ移転しました。さらに試験研究施設の2拠点化を図るため、内水面の機能を「浅海・内水面グループ」と県南佐伯市の「水産研究部」に振り分け、「浅海・内水面グループ」は4月26日付で「北部水産グループ」になり、「資源増殖チーム」と「養殖環境チーム」の2チーム制になりました。

続いて、令和元年度の当グループの主な研究課題を紹介します。

全国的にも不漁が続くアサリですが、カゴや被覆網などで稚貝を保護したり、稚貝を石原に散布することで、天然・人工種苗ともに成長し、漁獲につながる事が証明されています。現在、より簡便な手法と規模拡大を目指して現場で実証試験を行っています。

タイラギは、種苗生産技術開発と海底での養殖による母貝団地造成に取り組んでおり、新たな養殖業の振興と国見・姫島周辺海域を中心とした漁場の復活を目指しています。

高単価が続くヒジキですが、増殖と養殖の両面からの振興を図るため、母藻建材ブロックの移植技術の開発や、人工種苗ロープの量産化、収穫済み養殖ロープの越年利用などに取り組んでいます。

内水面関係では、アユ資源量の増加のため、主要河川における同資源の効果的な利用・増殖手法の検討を行い、アユ資源の維持増大策を提言します。

その他、赤潮・貝毒などの漁場環境保全調査や戦略魚種のタチウオ、ハマなどの資源管理強化に向けた調査研究、魚病防疫対策等についても、引き続き取り組んでいきます。

地元の漁業、養殖業に役立ち、皆様に必要とされる研究機関を目指して、職員一同、精一杯頑張りますので、引き続きご支援とご協力をお願いいたします。

## 水産試験研究機関が二拠点化へ

企画指導担当 主幹研究員(総括) 田村 勇司

2019年は年号が平成から令和へと変わり、新しい時代に向けてこれから世の中は様変わりしていくでしょうが、大分県の水産試験研究機関も組織が再編されて大きく変わりました。

これまで大分県の水産の試験研究は、佐伯市上浦の水産研究部が佐賀関以南の海域、豊後高田市呉崎の浅海・内水面グループ浅海チームが別府湾以北の海域、宇佐市安心院町の浅海・内水面グループ内水面チームが県内全域の内水面を担当していました。(図1の旧体制参照)

今回の組織再編では、今年3月末に安心院の内水面チーム施設が閉鎖されて、研究機関の名称、管轄エリア等も変更されました。図1に示したとおり、「浅海・内水面グループ」は「北部水産グループ」となり、また、水産研究部も含めてチーム名も変更されました。

海面の管轄エリアはこれまでと同じですが、内水面については水産研究部が佐伯市、臼杵市、津久見市を、北部水産グループがそれ以外の地域を管轄することとなります。(図2)これに伴い、北部水産グループには疾病対策に対応できる新たな施設が竣工しました。

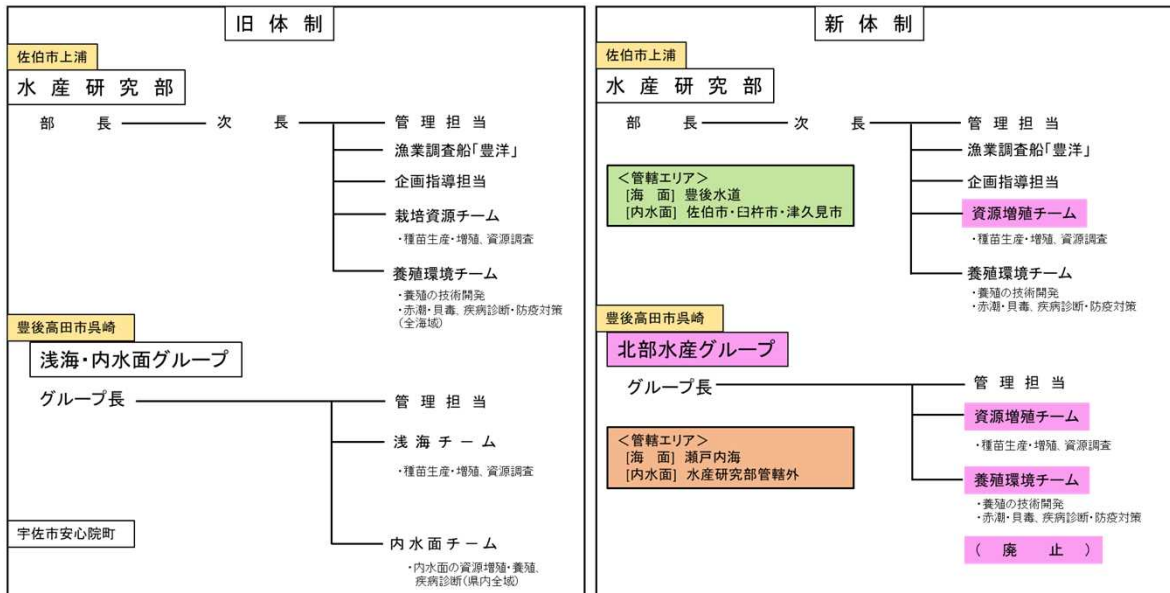


図1 大分県の水産試験研究機関の組織図 (令和元年4月26日～)

水産研究部と北部水産グループにそれぞれ配置された、「資源増殖チーム」は種苗生産・増殖、資源調査、「養殖環境チーム」は赤潮・貝毒、疾病診断・防疫対策について、内水面を含めて担当します。

試験研究施設は県南と県北に二拠点化しましたが、そのメリットを最大限に活用して、現地生産者ニーズに迅速に対応できる体制強化を図っていきます。



図2 管轄エリア地図

# アオリイカの資源管理と増殖方法の検討

水産研究部 資源増殖チーム 研究員 横山 純一

## 【はじめに】

アオリイカは大分県では「モイカ」と呼ばれており、漁業者のみならず遊漁者にも親しまれるイカです。見た目、歯ごたえ、味、鮮度も良いアオリイカは「イカの王様」と称されるほど価値の高いイカです。

大分県津久見市の津久見湾ではバツリ漁と呼ばれる船びき網や定置網で漁獲されています。10月から翌年1月にかけて「モイカフェスタ」というイベントを漁業者、漁協、飲食店、市が一体となり開催し、県内外から多くの観光客を毎年集客するほど人気の高いイベントとなっています。

このアオリイカについて、近年漁獲が減ってきたという現場の声があがったこと、今まで大分ではあまり調査の対象にされてこなかったことから、津久見湾を中心に2016年から2018年にかけて調査を行いました。3年間の調査でアオリイカの生態的知見を収集し、資源管理の方法やアオリイカ資源を増やす方法を検討しました。

## 【調査方法】

主な調査方法は、①.月ごとの外套背長(胴の背側の後端から先端の長さ)組成を把握するために、市場に水揚げされたアオリイカの外套背長を測定、②.産卵時期を把握するために定置網で漁獲されたアオリイカの性別、外套背長、体重、生殖腺重量の測定、③.水産研究部で試作した人工産卵礁の効果把握するために、潜水調査を行いました。

## 【調査結果】

まず市場調査の結果ですが、2016年4月から2019年3月までに臼杵、津久見、佐伯、鶴見で漁獲されたアオリイカの月別外套背長を図1に示しました、1月から4月は20cmを超える大型個体が主体となり8月から新規加入群が出現し9月から大型個体が消滅し小型個体が主体となることから寿命は約1年であることがわかりました。

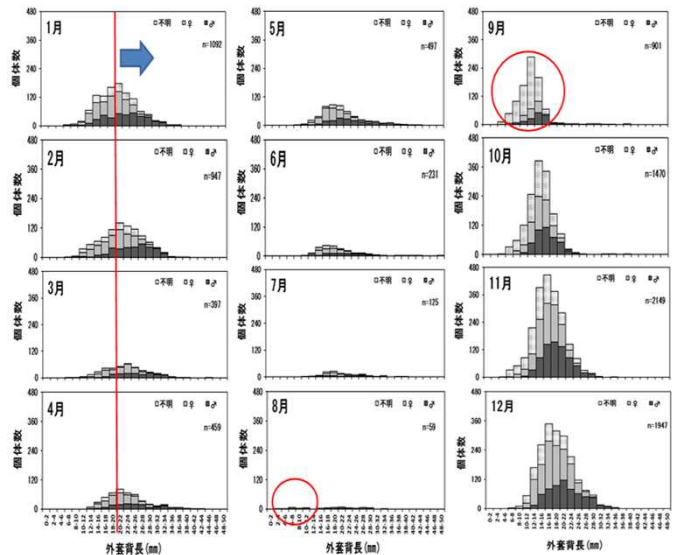


図1 2018年4月から2019年3月までの月別外套背長蘇生

続いて2016年3月から2019年2月にかけて津久見湾内の定置網で漁獲されたアオリイカの生殖腺重量指数(GSI:  $100 \times \text{生殖腺重量} / \text{体重}$ )の推移を図2に示しました。雌のGSIが4を越える個体が成熟していることから、津久見湾での産卵期は4月～8月と推定されました。

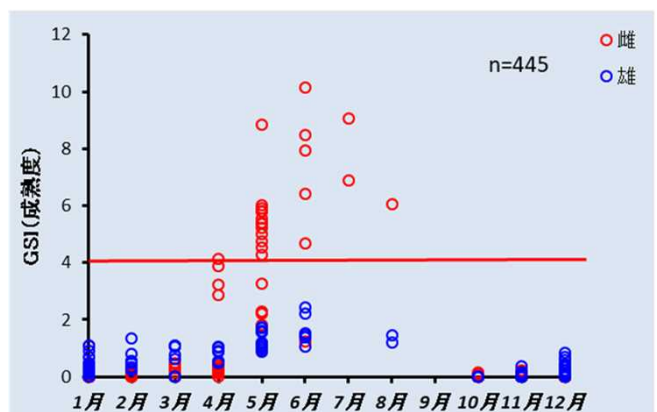


図2 アオリイカ生殖腺重量指数(GSI)の推移

2017年、2018年は当研究部で作成した簡易人工産卵礁(図3)を津久見湾に設置し産卵有無を調べるとともに、設置地点周辺の産卵状況を調査しました。残念ながら水産研究部の人工産卵礁に産卵は確認されませんでした。周辺の水深が2m程度で、ガラモやミルのような海藻の深部に産卵が確認されました(写真4)。水深2m程度の浅場で産卵すること、また津久見湾はガラモやミルのほかアマモやカジメなど海藻が繁茂しており豊かな産卵場であることが確認されました。



図3 2017～2018年に津久見湾で設置した簡易人工産卵礁



図4 “ミル”という海藻に確認されたアオリイカの卵囊塊

#### 【考えられる管理方策】

以上の結果から効率的にアオリイカ資源を利用するためには、寿命約1年であることから加入初期の不合理的漁獲を抑えるため小さい個体は取り過ぎないことが重要です。また次の年級群を少しでも増やすために産卵期の親イカを保護することも重要となります。例えば、産卵期の4月から8月は浅場での操業を控えるなどの資源管理の取り組みが考えられます。加えて津久見湾は産卵場所や幼魚の生育の場としての機能を有する藻場がたくさんあることから、藻場を大切に守ることもアオリイカ資源を持続的に活用するには必要であると考えられました。

#### 【さいごに】

平成30年度でアオリイカの事業は終了しましたが、水産研究部では今までの調査で使用した簡易人工産卵礁に改良を加えました。この簡易人工産卵礁は上浦地先、米水津地先に設置し、産卵の有無を調査しています(図5)。引き続き、人工産卵魚礁の改善・改良に取り組み、現場への助言や指導を行っていきたいと思います。



図5 上浦地先において新型人工産卵礁を設置している様子

# かぼすブリ・かぼすヒラマサに続く新ブランド！「かぼすヒラマサ」

水産研究部 養殖環境チーム 研究員 安原 翔太

## ● かぼす3兄弟の末っ子「かぼすヒラマサ」

大分県では、かぼすブリとかぼすヒラメに続く新ブランドとして、昨年の4月から「かぼすヒラマサ」の販売が開始されました。かぼすヒラマサは、ヒラマサが本来持つ上品な味わいに、かぼすの爽やかな香りとしっかりとした旨味とコクが加わっています。

今回は、このかぼす3兄弟の末っ子「かぼすヒラマサ」についてお話します。



## ● なぜかぼすヒラマサが誕生したのか？

かぼすヒラマサが生まれた背景には、かぼすブリの存在があります。かぼすブリの特徴の一つは「血合いの色鮮やかさが続く(見た目よし)」ことです。この特徴を生かすために販売時期は10月の第4金曜日(県産魚の日)から3月いっぱい決められています。

しかしながら、4月以降には歓迎会や入学式、ゴールデンウィーク等イベントが盛りだくさんです。そのため、流通関係者からは「4月以降に出荷できる、かぼすブリに続く魚はないのか？」という声が多く上がりました。

そこで注目されたのが、大分県のプライドフィッシュ「大分ヒラマサ」です。一般的にはヒラマサの旬はかぼすブリと反対の夏で、「大分ヒラマサ」のプレミアムブランドとして「かぼすヒラマサ」を開発し、ヒラマサ全体の認知度と価格を上げていこうという取り組みが始まりました。

## ● かぼすヒラマサの特徴

ここでは、平成27年から29年度にかけて当水産研究部で行った試験結果をもとに、かぼすヒラマサの特徴である「①味よし」、「②香りよし」、「③見た目よし」について解説します。

### ① 味よし

「旨味」、「塩味」、「酸味」など、味を数値で表す「味覚センサ」という機械で検査しました。かぼすの果皮パウダーを与えた場合は苦味雑味やうま味の数値が増加しました(図1)。

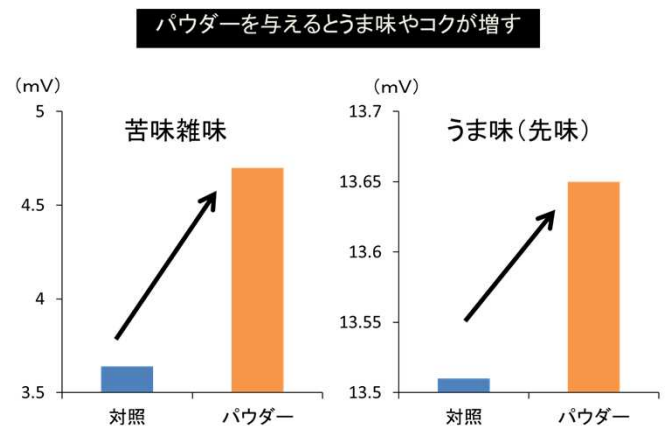


図1 味覚センサーによる定量値(パウダー)

苦味雑味の増加はコクが増したと捉えることができます。かぼすの生果皮を与えた場合は逆に苦味雑味の数値が減少し、すっきりとした味になりました(図2)。

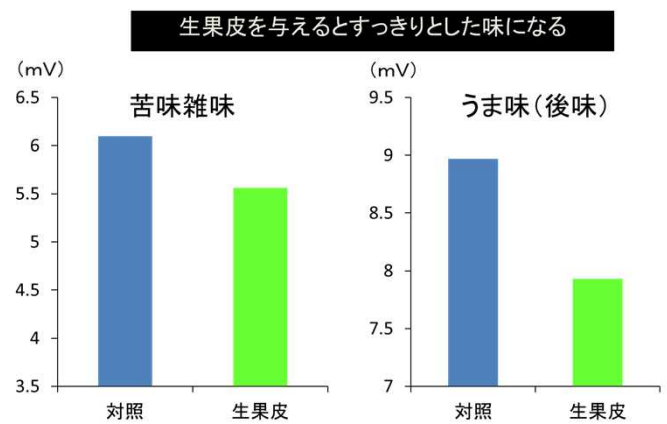


図2 味覚センサーによる定量値(生果皮)

## ② 香りよし

かぼす等の柑橘類は甘酸っぱく爽やかな香りがしますが、これは柑橘類の皮に含まれているリモネンという成分の香りです。このリモネンが含まれるかぼすの果皮パウダー及び生果皮をヒラマサの餌に混ぜて与えると、果皮パウダー、生果皮ともにヒラマサの筋肉中からリモネンが検出され、柑橘系の香りが筋肉中に移っていることが分かります(図3)。

筋肉中のリモネン量については、果皮パウダーよりも生果皮の方が多く検出されており、これは現在市販されているかぼすブリと同等のレベルでした。

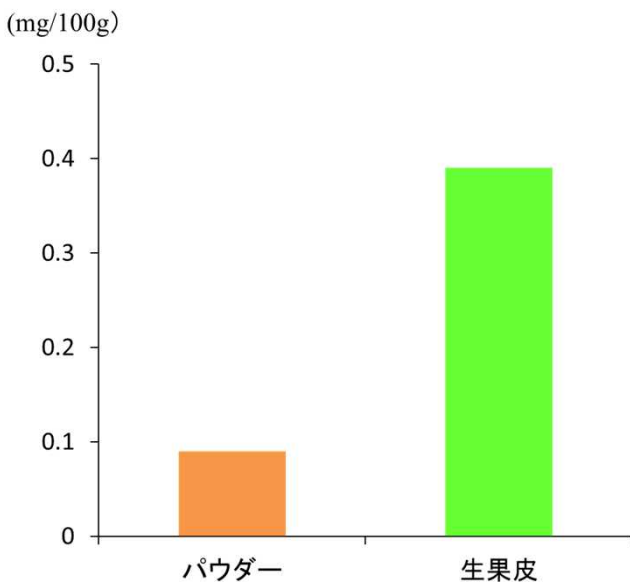


図3 ヒラマサ筋肉から検出された香り成分(リモネン)

## ③ 見た目よし

血合筋が褐変に至る(刺身として販売できない)レベルに達する時間を、色彩色差計と

いう機械で検査しました。ヒラマサはブリと比べて元々褐変しにくい魚ですが、果皮パウダー、生果皮ともに褐変に至る時間が長くなりました(図4)。こちらは香りと異なり、果皮パウダーの方が生果皮よりも褐変に至る時間が長く、優れている結果となりました。

(時間)

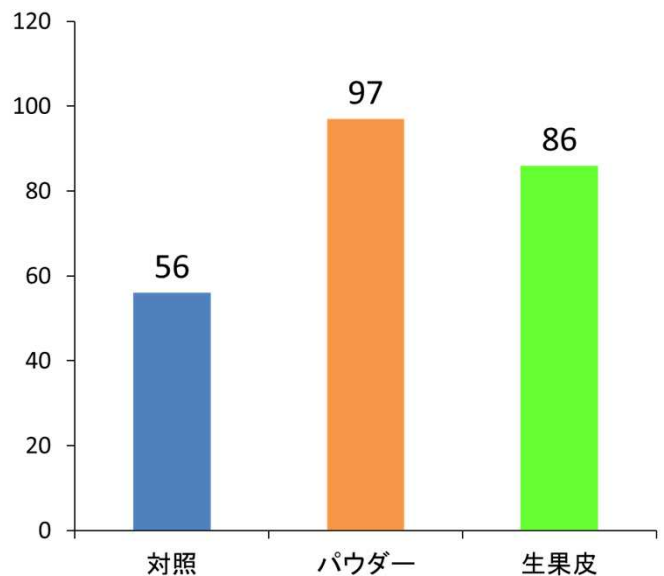


図4 血合筋が褐変に至る時間

## ● さいごに

かぼすヒラマサは、昨年度は3名の生産者が、今年度は1名の生産者が現場実証試験に取り組みました。昨年度は春限定の販売の予定でしたが、かぼすブリ、かぼすヒラメ取扱店を中心に販売継続の要望を頂き、夏と冬にも販売されました。今年度は、4月から6月にかけて販売する予定でしたが、評判が高く、4月末には完売しました。また、4月に行った店頭試食では、非常に好評でした。

これからの取り組みとしては、来年度のかぼすヒラマサ出荷に向けて、これまでの現場実証試験と当水産研究部の試験結果をもとに生産基準を策定していく予定です。消費者の皆様の期待に添えるよう「かぼすヒラマサ」の増産にむけて頑張りますので、よろしくお願いいたします。



# マガキの地場採苗技術の現地活用に向けて

北部水産グループ 資源増殖チーム 研究員 森本 遼平

近年、国の研究機関が中心となって簡便なマガキの地場採苗技術が開発されました。これは潮間帯にマガキの採苗器を設置することで、一粒ずつバラバラの“シングルシード”種苗(図1)を採苗する技術です。



図1 マガキのシングルシード種苗

一方、県下のカキ養殖においては、シングルシード種苗を用いた新たな養殖も展開されつつあり、今後一層の養殖振興に向けて種苗の安定確保や多様化を図っていく必要があります。このため、北部水産グループ資源増殖チームでは、平成30年度から国や関係県等と連携し「マガキ養殖システムの確立」に関する共同研究に取り組んでおり、現在、潮間帯を利用したマガキ天然採苗技術が本県においても有用であることを検証しているところです。

今回は、昨年度実施しました試験結果について、その一部をご紹介します。

試験地は県下で最もマガキ養殖が盛んな杵築市の灘手漁港に設定しました。また、マガキを付着させる基質には、カキ殻を粉砕・成形加工して製造された固形物「ケアシエル」を用いることにしました。具体的には、図2のようにパイプ状にしたネットロンネットの中に、同じくパイプ状にしたトリカルネットを差し込み、その中にケアシエルを収容し、ロープ、結束バンドで両端を閉じた採苗器を作成しました。

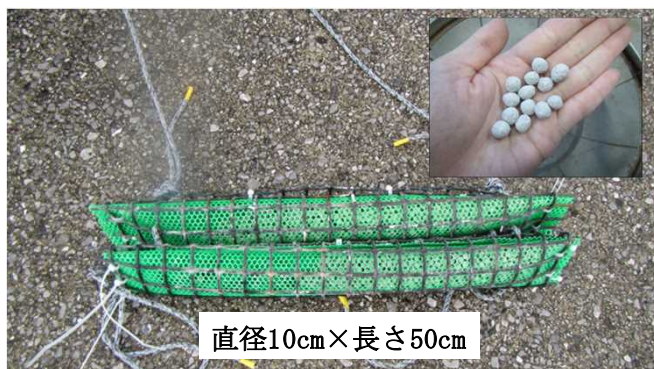


図2 ケアシエル採苗器

この採苗器を灘手漁港内3地点(図3)の天然カキが密生している岸壁に平成30年7月5日から垂下し、同年10月15日に採苗器を回収して、ケアシエルへのカキ稚貝の付着状況を確認しました。

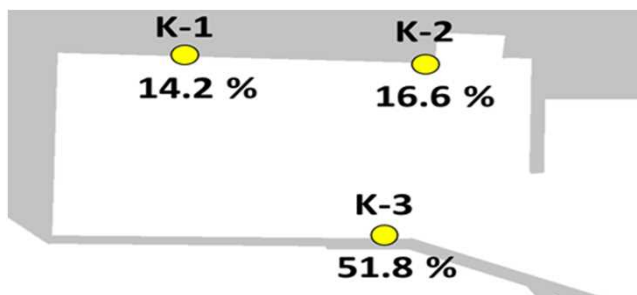


図3 杵築市灘手漁港におけるケアシエル採苗器の地点別付着率

回収した採苗器からケアシエルを取りだし、稚貝が付着しているものと付着していないものに分け、各地点の付着率を求めたところ、K-1で14.2%、K-2で16.6%、K-3で51.8%(全地点平均27.5%)となり、港口部に近いK-3での付着が良好な結果となりました(図3)。このような結果となった理由としては、港口部では海水交換が良好なことから、カキ浮遊幼生の来遊頻度が多かったためと推測されました。

また、これに関連し、採苗器外枠のマガキ稚貝の付着および成長の状況を見ると、こちらでも他2地点に比べK-3での結果が良好であり(図4)、潮の流れや餌料プランクトン量が稚貝の成長を左右する要因となっていることが示唆されました。



図4 マガキ稚貝の地点別付着状況(採苗器外枠)

今回の結果から、潮間帯を利用したマガキ天然採苗技術は本県においても活用可能であり、また、採苗や稚貝の成長に適した場所があることも分かりました。今後は、県下の海域特性に応じた採苗適地の探索に向け、採苗状況と流況等環境要因との関連性について検討していきたいと考えています。



# 北部水産グループに魚病棟が開設しました

北部水産グループ 養殖環境チーム 研究員 吉岡 宗祐

## 【はじめに】

平成31年4月1日、内水面チームが宇佐市安心院町から豊後高田市呉崎に移転し、新たに施設整備された魚病棟での業務を開始しました。同年4月26日には、浅海・内水年グループが北部水産グループへ改組され、海面養殖を対象とした魚病業務も行うようになりました。これまで魚病業務は、水産研究部が海面全域、内水面チームが県下全域を管轄して行っていましたが、今回の改組に伴い、海面は海区で、内水面は市町村で管轄エリアを分け、業務を行うことになりました。

北部水産グループの管轄エリアは、海面では瀬戸内海、内水面では中津市、宇佐市、豊後高田市、日田市、玖珠町、九重町、竹田市、豊後大野市、国東市、姫島村、杵築市、日出町、別府市、大分市、由布市です(図1)。



図1 管轄エリア(濃い色の地域)

管内の主な対象種は、海面ではクルマエビ、マガキ、ヒラメ、マコガレイ等、内水面ではアユ、アマゴ、ヤマメ、ニジマス、スッポン、ドジョウ、ウナギ等です。

## 【施設の概要】

新たな魚病棟は、延床面積130平方メートル、検査室兼実験室、ウイルス検査室、培養室、隔離実験室等からなります。内水面チームにはなかったリアルタイムPCR等の機器も新たに導入されました(図2、図3)。



図2 入口から見た施設



## 【主な業務】

業務内容はこれまで内水面チームで行ってきたことと大きく変わりませんが、この機会に紹介いたします。

### ○魚病診断

養殖漁業者から受取った検体を診断します。病気の原因となるのは、ウイルス、細菌、真菌、寄生虫等です。養殖場でできるだけ早く有効な対策をとれるよう、迅速な診断を心がけています(図4)。



図4 魚病診断の様子

### ○種苗健全性検査

放流魚や養殖魚として導入される種苗を対象に、細菌やウイルス等の保菌検査を行い、健全性を確認します。

### ○医薬品の適正使用の指導

水産用医薬品には法律に基づいた使用基準があります。食の安心・安全を守るため、適正使用の遵守を呼びかけるとともに、抗菌剤やワクチンの使用指導書の発行を行います。

### ○巡回指導・講習会

養殖漁業者を訪問し、疾病の発生状況や対策要望の聞き取りを行うことも重要な業務です。状況に応じて、養殖場の衛生管理を指導し、疾病対策をお伝えすることもあります。

また、県内で発生した疾病の状況や新たな知見等について、養殖漁業者にお伝えする講習会も開催します(図5)。



図5 講習会の様子

## ヒジキ養殖で干潟を元気に！

北部振興局 農山漁村振興部 山本 桂伊

豊前海には遠浅の砂浜で美しい干潟があります(図1)。ここ宇佐市は干潟を利用した潮干狩りが有名な和間海浜公園があります。また、かつてはノリ養殖が盛んで、季節になると辺りが活気づいていたそうですが、今では養殖業者が減少し広大な景観を残すのみとなりました。この干潟を有効活用したいと3年前に立ち上がったのが、大分県漁協宇佐支店の青年部です。



図1 宇佐干潟(長洲地区)

有効活用するにあたり目を付けたのが、当時健康ブームで注目されていたヒジキでした。さらに以前にヒジキを試験的に養殖していたことから、干潟におけるヒジキ養殖に取り組むことになりました(図2)。

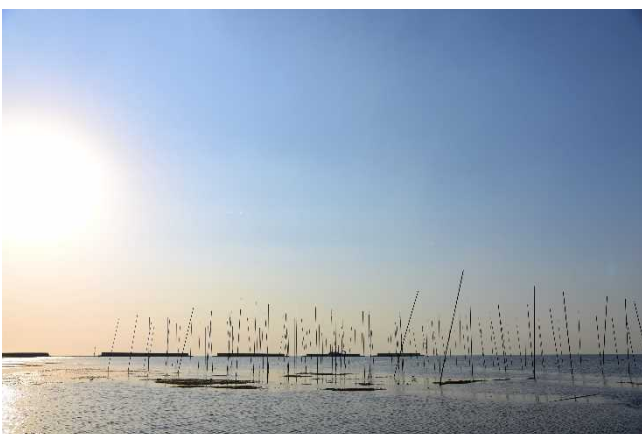


図2 ヒジキ養殖現場

1年目と2年目は試行錯誤の連続でした。養殖設備の破損や冬場に激しくなる波浪によるロープの絡まり等で思うような生産量に達することができませんでした。3年目は、これまで失敗を活かし、徹底した飼育管理で、前年度比で1mあたり約3.3倍の量(1.09kg/m、乾)のヒジキを生産しました(全体の生産量589kg(乾燥)は前年度比で4.5倍！)(図3)。



図3 養殖ヒジキ収穫作業

今後は安定的な生産量を保ちつつ、一部を出荷先の会社から買い戻し、青年部で販売していきます。これからPRにも力を入れていき、イベントを中心に販売していく予定です(図4)。ヒジキ養殖を通して、漁業者さんとともに干潟を元気にしていきたいです。



図4 販売に使用したポスター

## 1 背景

佐賀関では、海藻のカジメ(地方名:くろめ)が地域特産品として生や加工品で、広く利用されています(図1)。しかし、重要な磯根資源であるアワビなどの餌となることから、収穫期間が1月中旬から3月中旬までの2ヶ月間に限られており、収穫量が制限されています。そこで、養殖により収穫量の増加を図るため、平成29年度からカジメの養殖試験を実施しています。



図1 佐賀関の天然カジメ

## 2 方法および結果

平成30年11月、青年部佐賀関支部による協力のもと、カジメの種糸を幹ロープに結び付け、佐賀関の2地点(白木:養殖ロープ291m、一尺屋:養殖ロープ143m)で沖出ししました。

その後、4月に白木、6月に一尺屋にて収穫したところ、白木では平均葉長43.9cm、収穫重量50.9kg(養殖ロープ1mあたりカジメ0.2kg)、一尺屋では平均葉長29.1cm、収穫重量100.2kg(養殖ロープ1mあたりのカジメ0.7kg)のカジメを収穫することができました(図2、3)。葉の脱落や、葉への付着物が多いなど、まだ課題は多いですが、29年度の結果(平均葉長26.9cm、養殖ロープ1mあたりのカジメ0.12kg)と比較すると、葉長は長くなり、収穫重量も少しずつ増えてきています。

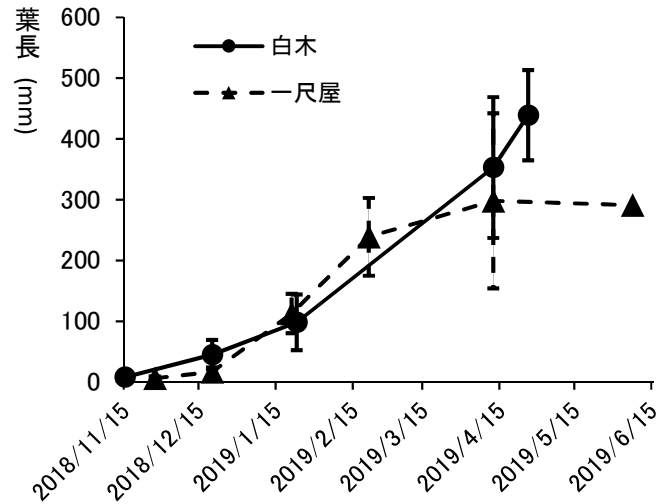


図2 養殖カジメの平均葉長の推移



図3 カジメを収穫する様子

## 3 今後の目標

カジメの種糸は、30年度までは、北部水産グループが作成したものを提供いただいていたましたが、令和元年度は、カジメの種糸を佐賀関で作成する試験を行い、現場での養殖サイクルの完成を目指します。その他、沖出し中の成長を促進、また付着物を減少させるため、養殖ロープの設置水深を漁場の流況により深く、3m、5mに下げる試みや、葉の脱落を防止するため、付着基質の検討なども行う予定です。

養殖カジメが、佐賀関の新しい特産品として親しまれるよう、技術向上に努め、精一杯支援していきたいと思います。

## 転入者紹介 ～よろしくお願ひします！～

### 《水産研究部》

【次長 澤田照彦】（工科短期大学から転入）

4月26日付けの異動で、工科短期大学からまいりました澤田と申します。商工労働部勤務が長く、農林水産部は平成5年から3年間勤めた農水産物加工総合指導センター以来の勤務となります。ただ、ここ佐伯は、県庁採用初任地として5年間、県税事務所に勤めていましたので、未だ土地勘は残っています。

当研究部は施設の老朽化が進んでいるので、安全・安心な施設管理に取り組むとともに、研究員・船員の皆さんが楽しく仕事ができるよう、心配りをしていきたいと考えています。私にとっては、当研究部が現役最後の職場となりますが、精一杯努めてまいりますので、どうぞ、よろしくお願ひいたします。

【主幹研究員 金澤 健】（浅海・内水面グループから転入）

このたびの異動で浅海・内水面グループから企画指導担当に配属になりました金澤と申します。業務は、予算編成、漁業調査船“豊洋”の運航に係わる調整、その他 各会議の開催や広報・広聴などを担当します。表舞台“現場”に出ることはありませんが、これからも、大分県水産業の発展に努めて参りますので、よろしくお願ひします。

【主任研究員 徳光俊二】（北部振興局から転入）

5年ぶりに水産研究部の資源増殖チームに戻りました。主な業務はタチウオ、クルマエビ、磯根資源の増殖です。これ以外にも現場ニーズを迅速に対応できるよう、新しく始めたいこと、困ったことなど気軽にご相談ください。

【研究員 鈴木翔太】（新規採用）

この度、新規採用で資源増殖チームに配属になりました鈴木翔太と申します。出身は大分県国東市です。ブリ類の完全養殖を目指して研究に取り組んでいます。早くお役に立てるよう日々頑張りたいと思います。

ご迷惑をお掛けすることが多々あるかと思いますが、ご指導のほどよろしくお願ひいたします。

【研究員 安原翔太】（水産振興課から転入）

この度の異動で、水産振興課漁場整備班から水産研究部養殖環境チームに配属となりました採用3年目の安原翔太です。養殖環境チームでは①かぼす養殖魚（主にブリ・ヒラマサ）に関すること、②水産利用加工に関すること、③藻類の養殖研究に関することの3点を担当します。

昨年度まで在籍していた漁場整備班とは全く異なる業務内容なので、ご迷惑をお掛けすることもあるかと思いますが、漁業者の皆様のお役に立てるよう努力してまいりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

【研究員 吉井啓亮】（浅海・内水面グループから転入）

今年度より、養殖環境チームに配属になりました吉井です。養殖衛生班で疾病診断やナナホシクダアの対策等を担当しております。昨年度までは、内水面チームで淡水魚の試験研究や疾病対策を行っていました。県南地域の淡水魚の疾病診断は引き続き担当しておりますので、よろしくお願ひします。

水産研究部に異動してからは、海水のべたつきを感じながらきれいな川の水に思いを馳せ、毎週海釣りに出るとは大分県の海の豊かさに感動する日々です。魚類の疾病診断はまだまだ勉強することばかりですが、安全安心な大分県の魚をみなさまに提供できるよう、尽力して参りますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

【研究員 村瀬直哉】（新規採用）

今年度の採用で、水産研究部・養殖環境チームに配属になりました村瀬直哉と申します。

大学では淡水魚の遺伝的集団構造の研究を行っていました。これまでの経験とは異なりますが、主に魚病診断、水産用医薬品の適正使用指導等を担当します。魚病診断の際には顔を合わせることもあると思います。

まだ、不慣れなことがありご迷惑をおかけすると思いますが、養殖業者の方のお役に立てるよう精一杯頑張りますので、よろしくお願ひいたします。

### 《北部水産グループ》

【研究員 古川あさひ】（水産振興課から転入）

この度の異動で、水産振興課から北部水産グループ養殖環境チームに配属となりました古川と申します。昨年度までは、共同利用施設の整備等を担当しておりました。養殖環境チームでは、藻類養殖および増殖の担当をします。これから精進してまいりますので、よろしくお願ひします。

【研究員 森本遼平】（新規採用）

この度、新規採用で北部水産グループの資源増殖チームに配属になりました、森本遼平と申します。マガキ・餌料培養等を担当いたします。未熟な点も多いですが、一日でも早く大分県の水産業の発展に貢献できるよう、精一杯努力して参りますので、よろしくお願ひいたします。

【研究員 西 陽平】（新規採用）

新規採用で北部水産グループ養殖環境チームに配属になりました、西陽平と申します。担当業務はアユ等内水面関係を担当しております。出身は山梨県富士河口湖町で、大分県に来るのは初めてです。不慣れなことが多く、ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、お役に立てるよう一生懸命に頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

## 令和元年度 水産研究部のスタッフ及び担当業務

水産研究部長 古川 英一		次長 澤田 照彦	
部 所	職 名	氏 名	主な担当業務
管理担当	課長補佐(総括)	武石 誠一郎	管理担当の総括、人材育成、県有財産管理、電子県庁関係事務 予算の調整・執行・決算、収入に関すること、出納事務、行政文書管理システム、物品管理
	副主幹	富松 善憲	
調査船 豊洋	船長	清川 弘一	調査船の総括、人材育成 調査船の運航管理、機関の保守点検全般 一等航海士: 運航管理、船舶検査関係等事務、海洋観測業務 一等機関士: 機関保守点検、海洋観測業務、調査器具使用・保守管理 次席一等航海士: 無線通信業務、海洋観測業務、調査器具使用・保守管理 次席一等機関士: 機関保守点検、海洋観測業務、気象情報収集 二等航海士: 安全衛生担当業務、海洋観測業務、気象情報収集
	機関長	高木 幹也	
	主任船舶技師	増本 智之	
	主任船舶技師	合田 龍二郎	
	技師	藤澤 芳宏	
	技師	飯沼 三代	
企画指導担当	主幹研究員(総括)	田村 勇司	企画指導担当の総括、調査研究の企画及び連絡調整、調査研究成果のとりまとめ及び広報・外部評価に関すること 水産研究部の予算編成、漁業調査船に係わる調整、調査船代船建造、その他企画調整
	主幹研究員	金澤 健	
資源増殖チーム	主幹研究員(TL)	堤 憲太郎	研究総括、人材育成、上浦保護水面 タチウオ増殖技術開発、磯焼け対策、藻類増殖、クルマエビ育種 クルマエビの栽培資源、放流技術開発全般、高水温耐性ヒラメの飼育管理 ブリ種苗生産技術開発、餌料培養の技術開発、その他種苗生産技術開発 浮魚(アジ・サバ類)の資源・生態調査研究、資源に関する基礎調査、内水面の資源・生態調査 タチウオ資源回復推進、資源管理型漁業(TAE等)推進に係る調査研究、底魚の資源・生態調査研究、水産基盤整備事業調査 資源・海況の情報提供、TAC、漁海況に関すること、ハマの生態調査
	主任研究員	徳光 俊二	
	研究員	小谷 奈央	
	研究員	鈴木 翔太	
	研究員	中尾 拓貴	
	研究員	横山 純一	
養殖環境チーム	主幹研究員(TL)	内海 訓弘	研究総括、人材育成、赤潮被害軽減技術開発及び既存技術の高度化 LED活用による養殖生産技術開発、水産物品質保持技術及び流通改善技術開発、海産魚介類養殖技術開発及び指導・普及 低コスト飼料・効率的養殖生産手法開発、水産利用加工の指導・研修及び調査、藻類の養殖研究 養殖漁場環境調査及び適正管理推進、沿岸漁場環境保全、漁場観測及び海況調査(浅海定線調査)、環境に起因する漁業被害防止 赤潮・貝毒の監視および予知技術開発、赤潮・貝毒等漁業被害防止技術開発、赤潮・貝毒原因プランクトン研究 海産魚介類の病害防除・健康診断技術開発、特定疾病等(持続的養殖生産確保法)対策 養殖生産物の食品安全衛生、養殖海産魚介類種苗の健全性確保、海産魚介類病原体検出技術開発 海産魚介類の疾病診断・衛生管理指導、水産用抗菌剤・ワクチン等の適正使用指導、養殖海産魚介類の疾病被害等調査
	主任研究員	都留 久美子	
	研究員	安原 翔太	
	研究員	中里 礼大	
	研究員	井口 大輝	
	主幹研究員	木本 圭輔	
	研究員	吉井 啓亮	
	研究員	村瀬 直哉	
北部水産グループ長 伊藤 龍星			
管理担当	主幹	津崎 晋二	庶務・会計
資源増殖チーム	主幹研究員(TL)	木村 聡一郎	研究総括、人材育成、研究予算、資源評価調査(資源関連)、他機関との連絡調整 資源評価、キジハタ種苗生産技術開発、ナマコ増養殖技術、河川資源タイラギ種苗生産および増養殖、アサリ増養殖技術、クルマエビ育種、種苗生産施設維持管理 資源管理(タチウオ、トラフグ、サワラ、シヤコ等)、放流効果調査(マコガレイ、キジハタ、オニオコゼ、ガザミ等)、魚礁効果調査 カキ類種苗生産・養殖、海洋環境調査、種苗生産用生物餌料培養
	主任研究員	白樫 真	
	主任研究員	山田 英俊	
	研究員	濱田 真悠子	
養殖環境チーム	研究員	森本 遼平	研究総括、人材育成、研究予算、内水面に関する総括、研究成果普及 赤潮・貝毒調査、被害防止対策研究、漁場環境調査研究(河川含む)、クルマエビ養殖等に関すること 疾病診断・魚類防疫、内水面養殖技術普及、淡水養殖魚の飼料開発 藻類の研究・指導、ヒジキ増養殖、ノリ養殖病害対策研究 河川環境(アユ、エノハ、モクズガニ等)に関すること、カワウ・外来魚対策、希少水生生物保存対策
	主幹研究員(TL)	畔地 和久	
	主幹研究員	岩野 英樹	
	研究員	吉岡 宗祐	
	研究員	古川 あさひ	
研究員	西 陽平		
職員数40名(内訳 研究職27名 海事職7名 行政職員等6名)			



大分県人権啓発イメージキャラクター  
こころちゃん

# 令和元年度 人権ポスター募集

大分県では、人権意識の普及・高揚を図るために人権ポスターの募集を行っています。  
(募集期間 令和元年7月1日～令和元年9月10日)

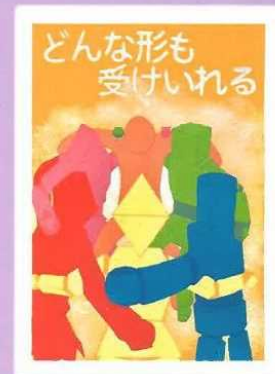
## 平成30年度人権ポスター最優秀賞受賞作品



中嶋 心暖 さん  
(国東市立安岐小学校 6年)



上野 ことみ さん  
(大分市立城東中学校 2年)



安東 光 さん  
(大分県立鶴崎工業高等学校 2年)

主催 大分県、大分県教育委員会、大分県人権教育・啓発推進協議会  
問い合わせ・応募先 大分県生活環境部人権・同和対策課 大分市大手町3-1-1 電話 097-506-3177

## 編 集

大分県農林水産研究指導センター水産研究部

## 発行者・連絡先

大分県農林水産研究指導センター水産研究部  
ホームページアドレス <http://www.pref.oita.jp/soshiki/15090/>

水産研究部  
管理担当、企画指導担当  
資源増殖チーム、養殖環境チーム

〒879-2602 佐伯市上浦大字津井浦194-6  
Tel: (0972) 32-2155 Fax: (0972) 32-2156  
E-mail: a15090@pref.oita.lg.jp

水産研究部 北部水産グループ  
管理担当  
資源増殖チーム、養殖環境チーム

〒879-0608 豊後高田市呉崎3386  
Tel: (0978) 22-2405 Fax: (0978) 24-3061  
E-mail: a15091@pref.oita.lg.jp